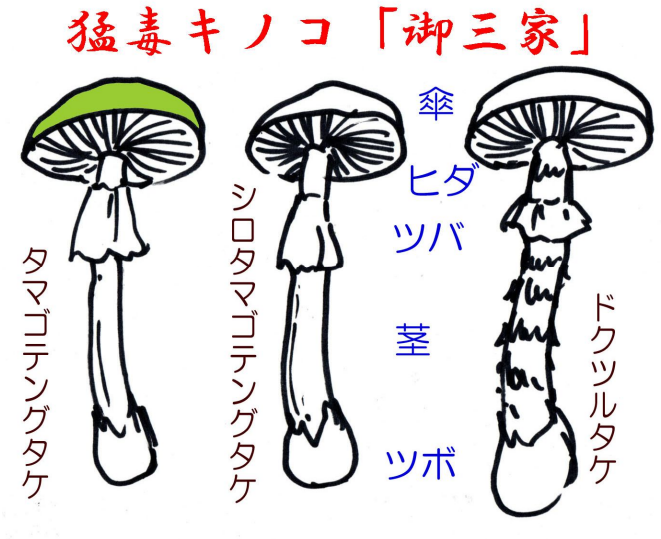
「日々の理科」（第 2215 号） 2020,-8,-4

「猛毒キノコの探究（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

「テングタケ科」のキノコには毒キノコが多い。その中でも「猛毒キノコ御三家」と呼ばれる凶悪なキノコが、以下の３種類である。



タマゴテングタケは傘がオリーブ色なので、すぐにわかる。ドクツルタケも真っ白でよく似ているが、「ツバ」がやや小さいことと、茎に「ささくれ」が多いことで容易に区別できる。大切なことは、テングタケ科のキノコは「傘・ヒダ・ツバ・茎・ツボ」がすべて揃った、「五体満足」の子実体という点である。

私が見つけたキノコは「シロタマゴテングタケ」*Amanita verna* と同定した。キノコ好きの者は、テングタケ属のキノコを見つけると、属名をそのまま読んで「アマニタがあった！」などと言うこともある。

シロタマゴテングタケは「猛毒御三家」の一つで、小さな幼菌でも食すれば死に至ることがある。食するとコレラのような腹痛と下痢が起こり、溶血性毒性分が肝臓や腎臓の組織を破壊、死に至るという。

自然界の生物の「形状」や「ふるまい」には必ず理由がある。しかし、キノコの毒だけは理由がわからない。「動物に食べられないように」とも考えられるが、それもちがう。それなら、大部分のキノコに毒があるはずだ。シロタマゴテングタケの属する「テングタケ属（*Amanita*）」でさえ、ほとんどは無毒だ。

実際にこの恐るべき猛毒菌も、昆虫にとっては餌でしかない。私が採集した個体にも、何匹もの虫（キノコムシの成虫や、キノコバエの幼虫）が潜んでいた。彼らにとっては、このキノコの毒性分は無害なのだ。

ヒダには小さな穴がたくさん見られた。これはキノコバエの幼虫（蛆）が、盛んに食べた跡である。これを見ただけでも、「虫が喰っているキノコは無毒」という言い伝えが、迷信であることが証明される。